

- 1 実施日 2017年2月4日(日) 14:00~17:00
- 2 場所 日本大学経済学部2号館経済教育ネットワーク東京オフィス
- 3 参加者 葦名、杉田、金子、埴、芦名、高橋、黒川、弓矢、新井の9名
- 4 主な内容

1) 新井が用意した、国際経済の理論のドラフトをもとにレクチャーと質疑、討論を行った。

ドラフトの内容は以下の通り、(7は第7章の意味)

7-1 貿易の理論

- ①貿易の利益 ②比較優位の原則 ③自由貿易と保護貿易 ④貿易政策の政治経済学

7-2 国際収支の構造

- ①国際収支表の見方 ②新しい国際収支表の意味 ③世界の貿易とお金の流れを国際収支表から読む

7-3 為替の仕組みと歴史

- ①為替レート ②金本位制下の為替変動 ③金ドル本位制下の固定レート制度 ④変動相場制

7-4 為替レートの決定要因

- ①経常収支による要因 ②金融収支による要因 ③インフレ率の要 ④購買力平価説
- ⑤金利差 ⑥金融資産の運用 ⑦その他の要因

7-5 円高と円安の経済への影響

- ①円高の経済への影響 ②為替変動と利益

7-6 国際金融のトリレンマ

- ①固定相場制の制約 ②最近の動向の分析

7-7 経済発展の理論と現状

- ①経済発展の要因 ②経済発展の理論 ③日本の成長はモデルになるか ④新しい現実

2) このドラフトは、ほぼ現行の指導要領、教科書に即しているが、貿易、為替をつなぐ論理、筋道が見えてこないでそれぞれの項目が独立して教えられてしまうという問題点を持っていることが新井から提示された。

その問題をカバーする説明としてクルーグマンの『マクロ経済学』に基づく以下の説明が補足された。

①貿易と国際収支に関して

- ・経常収支と金融収支がバランスすることを確認
- ・経常収支が赤字だった場合、簡単に金融収支が黒字になることはない。(投資をするメリットがなければ海外投資はしない)
- ・海外投資の誘因は金利であり、金利差が投資を招くが、それは二つの国の利子率を均等化させてゆく。
- ・にもかかわらず投資がすすむのは、投資先があるかないかであり、それは経済成長の

差である。(つまり、低成長の国には投資先が少ないから高成長の国に投資をする)

- ・その黄金時代が 1870 年から 1914 年までのイギリスからの国際投資であった。

②為替レートの役割

- ・次に、問題になるのは為替レートである。
- ・均衡為替レートは円とドルの需要、供給で決まる。もし、何らかの要因で日本からアメリカへ資本移動が増えたとすると、ドルの需要が増え、ドルの価格が上がる。つまり、ドルは増価（ドル高）する。
- ・ドル高になると輸出はやりにくくなり、輸入はやりやすくなる。アメリカの人間にとって安い日本製品が買えるので今度はドルを使って日本製品を買うだろう。そうするとドルの供給が増え、ドル価格は下がる。つまり、ドルは減価（ドル安）する。
- ・変動相場制での為替レートの変化は、このように金融収支の変化と経常収支の変化を互いに打ち消すように動くのである。
- ・ただし、この時に問題になるのは、名目の為替レートではなく、実質為替レートである。経常収支は、実質為替レートの変化にのみ反応する。
- ・購買力平価も実質為替レートに関連する。

③固定制と変動制、その問題

- ・為替レートは国際取引に影響する。為替レートには変動制と固定制がある。
- ・まずは、どうして固定制を維持できるのか。そのメカニズムを知っておく必要がある。それには、三つの方法がある。
- ・一つは、為替介入。だから外貨準備が必要になる。二つ目は、金融政策を通して利子率を変化させること。三つめは為替管理をすることである。
- ・為替レートを固定化させるには、膨大な外貨準備などコストがかかる。マイナスの方が多い。

④国際収支とマクロ経済政策

- ・固定相場制では、通貨の切り下げや切り上げが行われる可能性が高い。
- ・変動相場制では、国内の金融政策や財政政策が為替レートと連動するので、特に大国の場合、一国の経済政策が世界と連動する。

3) 質疑と討論

新井からここまでの説明で以下のような問題提起が行われた。

- ・クルーグマンの説明はモデルを使った説明。論理で迫る方法である。
- ・金本位制→金ドル本位制→変動相場制と、歴史的な説明をするよりも、貿易と為替をつなぐ論理を押さえて理解する（ストーリーを自分なりにつかむ）ことの方が国際経済の理解が進むのではないか？
- ・現在の教科書の説明、新井のドラフトの説明の流れでは、貿易、資本移動、金利の役割、為替レートの役割などを一貫して読み通すことはできない。
- ・とはいえ、クルーグマン流の説明を高校教科書に求めることも難しい。
- ・どのような流れでこの部分を理解し、説明するか。課題である。

これに対して、葦名先生から、ご自身の実践を振り返り、このようなモデル型の授業をするのではなく、戦後の国際政治・経済の歴史をたどりながら、政治的な構造変化と国際

経済の仕組みの変化と意味をたどる授業だと、生徒の理解と反応が良かったという発言と資料の提供があった。それをうけて、国際経済特に貿易と為替に関しては歴史的なアプローチと理論的なアプローチの授業方法の二つのバランスをいかに取るかがあらためて課題として提起された。結論的には、生徒の理解度や授業の目的（教養か受験かなど）によって両者のよいところを取り上げてゆくことに落ち着いたが、現在の教科書の書きぶりからみて、歴史アプローチも、理論アプローチもどちらもこれでは生徒にとって全体像、仕組みを理解するのが難しいという点の確認ができたと思われる。

5) その他

中心の議論が、貿易と為替問題であったが、そのほか国際的経済格差の問題、開発経済の問題などに関しても、いかに理解するのかのレクチャーと質疑があった。そこでは、日本の近代化をケーススタディとして開発問題を具体的に理解させる方法などの紹介があった。

また、葦名先生からは、国際経済に関する最近の文献リサーチのまとめの貴重な資料も配付いただいた。

6) まとめと今後

新井のドラフトに基づいた教えるための経済学寺子屋の第一期は、第9回のこれで終了し、今後新たな企画で第二期を開始する予定で準備をしてゆくこととなった。

第二期の開始時期は、4月以降になるが、ここまでの寺子屋の内容をまとめて発信してゆくことで、経済を教えるためにはどのような経済理論を教員が身に着ける必要があるかに関する問題提起をしてゆきたいと考えている。

以上、まとめと文責 新井